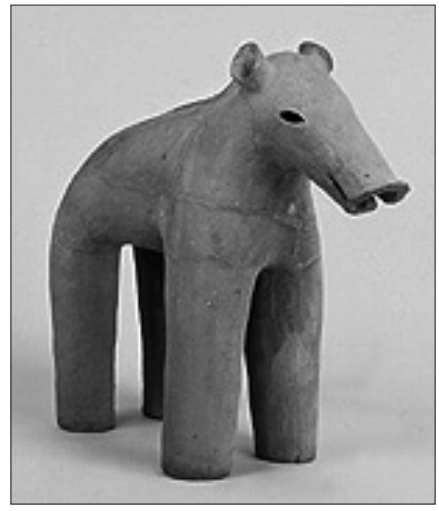
「平成未年記念：令和元年　日本美術のなかの猪　己亥（つちのと・い）－日本の絵画・造形における猪」
『あいだ』第247号　2019年5月20日 21-27頁

あいだのすみっこ不定期漫遊連載　第133回

平成未年記念：令和元年　日本美術のなかの猪
己亥（つちのと・い）――日本の絵画・造形における猪

稲賀 繁美（いなが　しげみ／国際日本文化研究センター，総合研究大学院大学教授，放送大学客員教授）

群馬県の境町剛志天神山古墳は，動物の埴輪が多種埋葬されていたことで著名である。広瀬川の右岸に位置し，西暦６世紀後半と推定される。国指定重要文化財となっている《猪形埴輪》■01は，先行する，「戌」（連載238号）でもふれた埴輪《犬形埴輪》と対になって出土した。高さ50cmと，犬よりもわずかに大きい。犬と猪が対になって出土する例は全国で幾つか知られ，保和田Ⅶ遺跡では矢の刺さった手負いの猪が見つかっており，狩猟儀礼に関係するらしい。



■01　《猪形埴輪》6世紀後半　境町剛志天神山古墳　東京国立博物館

和気清麻呂伝説

歴史時代にはいって猪にまつわる著名な逸話としては，和気清麻呂伝説がある。弓削道鏡に皇位を与えるべきか否か，宇佐神宮の神託の真偽を確かめるよう称徳天皇より命じられた清麻呂は，道鏡に不利な神託を持ち帰ったため，道鏡より大隅に追放され，暗殺の危機に瀕した。だがそこに突如300頭に及ぶ猪が現れ，清麻呂を救い出し，患った足を治療する冷泉へと導き，宇佐八幡宮まで無事に送り届けた，という。『日本後紀』第８巻に見える記事だが，岡山の和気神社ではこの奇瑞にちなみ，狛犬のかわりに狛猪を安置している。同社は大正８（1919）年以降，相殿に応神天皇を祭り，県社に列せられた。霧島にも和気神社が存在するが，これは幕末に尊皇運動が高まりをみせるなか，島津斉彬の命による調査で，この地が清麿の配流地と確定されたことに因む。ここにも狛猪が神社の両脇に鎮座している。和気の家系は帰化人の秦氏と結びつきが深く，大隅はその入植地でもあった。

京都の上京区烏丸の護王神社も和気清麻呂と和気広虫を主祭神とする。元来は高雄神護寺境内にあったと伝えられるが，

図02《十円紙幣》1913年発行

嘉永４（1851）年，孝明天皇が清麿に護王大明神の神号と正一位の神階を授けた。護王神社と改称されて現在の地に移ったのは明治19（1886）年。明治23（1890）年から，狛犬に変えて狛猪が置かれ，通称，「いのしし神社」の異名を取る。ちなみにこの年から日本の敗戦まで発行されていた日本銀行券10円紙幣には，和気清麻呂と護王神社が描かれていた。1890年版の枠には８頭の猪が小さく刻まれ，1913年発行のものには裏面に大きな猪が描かれていた■02。この年代の人々には親しまれた図像だろう。

日欧交易と「写実性」の問題

次に，残存する美術品から，めぼしいものを拾っておこう。《鳥獣戯画》（12-13世紀）■03の甲編（東京国立博物館）には，猪を馬に見立てた場面がある。蛙が御者を務め，兎が毛並を整えており，いざ出立といった風情。そして丙編（同上）には，猪に跨った兎と，犬に跨った蛙が，まさに競争を始めようとしている。鎌倉時代には《富士の巻狩り》が画題として定着する。《華厳宗祖師絵伝》（高山寺）■図４には獲物として担がれてゆく猪の姿もある。蒔絵仕立ての漆の作例も《マザラン侯爵家の櫃》（V&A美術館）■図５に伝わる。さらに時代が下った安土・桃山時代，16世紀末には，ポルトガル船の来航とともに《南蛮屏風》が制作されるようになる。《南蛮人交易図屏風》（神戸市立博物館）■図６は，探幽の原図が幾つか模写された遺品のひとつで，元文５（1740）年の年記，之信筆とある。中国人や韃靼人も立ち混じり，長崎での交易かとも推測されるが，そこには野猪の親子が詳細に描きこまれている。

円山応挙（1733-1795）には猪の写生について，「応挙と臥猪」という有名な逸話が伝わる。臥している猪がいるというので応挙はそれを写生した。だが，鞍馬から来た老人に見せると毛並が悪く病気の猪だという。数日たつと，はたしてその猪はすでに死んでいた，という（南方熊楠の，

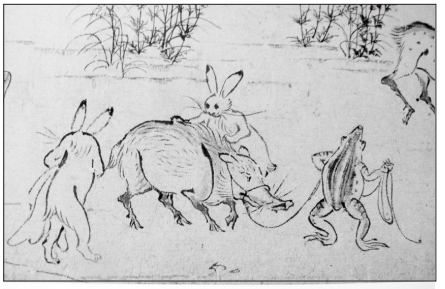
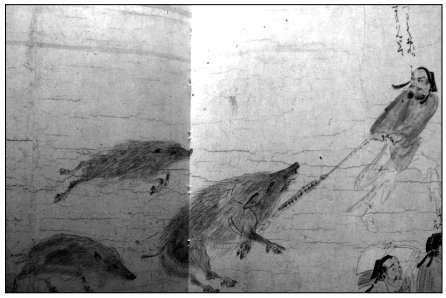
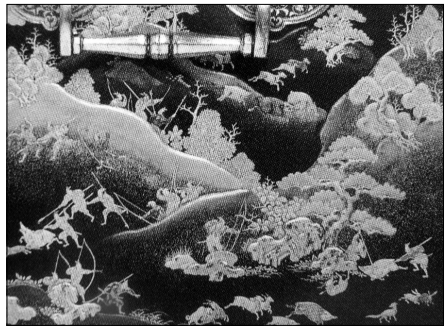


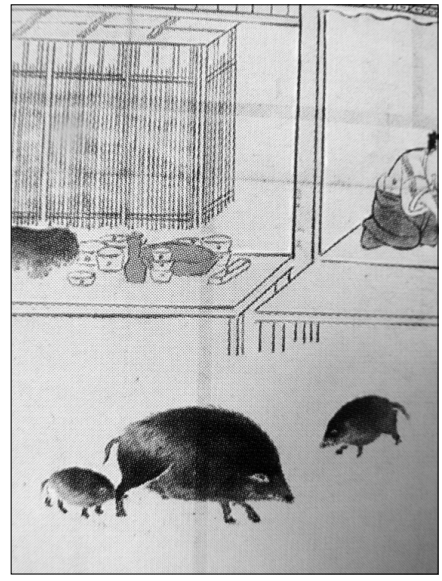
図03《鳥獣戯画》12-13世紀の甲編　東京国立博物館



■04　華厳宗祖師絵伝　鎌倉時代



■05《富士の巻狩り（マザラン公爵の櫃》（部分）》
鎌倉時代



■06《南蛮人交易図屏風》（部分）神戸市立博物館

『十二支考』に見られる記事で，出典は滝沢馬琴の『蓑傘両談』，『嘯風亭話』にも見える）。写生とは実物を写すことであり，応挙はそれを忠実に実践していた，という近代主義的な教訓として読まれてきた逸話である。だが，病気の毛並だと聞いて自作を修正したとき，応挙は実物を見ていない。これを矛盾だとする見解が多く行われてきた。写生という言葉が，明治以降とは違って，当時はきわめて鷹揚に理解されていた，などという見解もある。だがこれは単純なパラダイムの取り違いだろう。問題は対象の生命を写しとることにあり，死にかけの猪の生命力の欠如を，応挙はそうとも知らず見事に写し取っていた。そして作品に生気を宿らすには，かならずしも実物を臨写する必要などなかったのである。さらに臥猪（ふしい）という言葉は，音が，「撫綏」に通じ，「民を撫でやすんずる」ことを指し，安泰で太平の世を治める善政を讃える言葉だという。つまりこの主題は，実際に臥している猪の写生とは無縁の「縁起物」だった。

このように，猪という主題は，図らずも，応挙を「近代的に理解」する癖の陥穽を暴くリトマス試験紙となった。同様の思い込みは，いわゆる洋風画についても妥当する。石川大浪（1762–1818）の《天地開闢の図》■07（1800頃，神戸市立博物館）はアダムとエヴァの誕生に動物たちが集う光景だが，寄り集う動物たちの描写が写実的だからといって，天地創造の場面が空想であることには変わりはない。ここには象や獅子の傍らに猪もいるが，西洋

■07　石川大浪《天地開闢の図》
神戸市立博物館蔵

■08　津田信夫《臥猪》1935年
個人蔵

的表現だからといって，それが写実の結果であるとは限らない。また敢えて写生せずとも写実的表現は可能だろう。はるか後になるが，東京美術学校で金属彫塑の教授であった津田信夫（1876-1946）も《臥猪》(1935) ■08を制作している。フランソワ・ポンポンなどフランスの彫塑家の作品に身近に接し，アール・デコの洗礼を受けた津田だが，その主題はあくまで中国的な教養の語呂合わせに由来する。

仏教図像のなかの猪

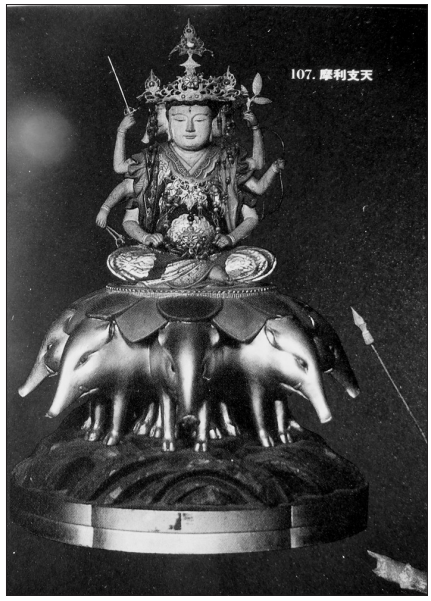
京都・祇園にある建仁寺の禅居庵は摩利支天堂として知られる■09。言い伝えでは鎌倉時代，清拙正澄禅師（1274-1339）が幕府執権・北条高時の招きで日本に渡った折に持参した摩利支天像が安置されていたともいう。が，これは応仁・文明の乱（1467-77）で焼亡する。現在の摩利支天堂は慶長年間（1596−1615）の再建で，1995年京都府の文化財に指定された。本尊の秘仏・摩利支天は7頭の猪のうえに坐しており，武運を司り，運命勝利を招くという。摩利支天という女神は，元来インドの古代民間信仰では陽炎あるいは日輪の暈が神格化されたものとされ，サンスクリットのマリーシーに由来し，陽炎のように捉えがたく傷つけられぬことから，戦国武将のあいだで信仰が広がった。古くは楠正成が兜に摩利支天像を収めたといい，戦国時代では毛利元就，前田利家などが摩利支天を信仰している。さらに信長の父，織田信秀もこの摩利支天堂を1547年に再建し，仏像を寄進している。

■09　《狛猪》　建仁寺　禅居庵　摩利支天堂

こうした民間図像の彫塑は，美術史的には低い評価しか得ない場合が多い。とはいえ民衆の信仰で尊崇されたことは，例

えばフランスの宗教研究者エミール・ギメが日本から持ち帰った作例（現在パリのギメ国立東洋美術館別館蔵）をみても納得されよう。その一例は女神の姿だが，ここで摩利支天は六つの腕にそれぞれの武具を持ち，金色の７頭の野猪のうえに結跏趺坐している■10。またいまひとつの作例は，天台宗の影響で男神として造形されており，泉岳寺にはこれに類似した摩利支天が，大石良雄護身の品として伝えられている。さらに第３の例は一頭の猪の背に立つ火焔髪の忿怒相であり，日蓮宗に流布した姿だという■11。上野下谷の妙宣山徳大寺に祀られた像であった旨，櫃の蓋の内側に記載がある。

さらに十二の干支にまつわる猪の図像にも手短に言及しよう。《十二類絵巻》（15世紀）■12は干支の動物たち勢揃いの宴会風景だが，猪は山芋を持参し，萩の模様の意匠をまとう。時代が下って曾我



■10　《摩利支天像》　パリ・ギメ国立東洋美術館別館蔵（2015年夏まで展示）

■11　《摩利支天像》　パリ・ギメ国立東洋美術館別館蔵（2015年夏まで展示）

蕭白（1730－1781）にも即興で描いた《猪》の墨絵が知られる（個人蔵）■13。濃墨の鼻づらや爪と，淡墨による体躯との対比も卓抜だ。干支の動物たちの彫塑としては，仏教建築に付随した作品が残存する。備中国分寺の五重塔のほか，日光東照宮の五重塔も知られる。小浜藩藩主，酒井忠勝が1650年に寄進したものだが1815年に焼失し，1818年に酒井忠進により再建されたものが，現在の遺品である。はたして左甚五郎の彫塑は写実的か否かといった議論もあるが，そもそも写実の意味が不明確では議論が底割れする。問題にすべきは西洋近代の解剖学の知識の有無であろう。また中国舶来の伝記物語，『西遊記』の翻案や挿絵も看過できない。猪八戒は日本でも広く人気を博した豚の妖怪である。

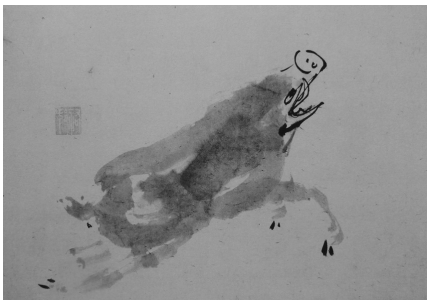
近代の猪

宗教的背景（摩利支天），道徳的寓意（「臥

■12　猪《十二類絵巻》15世紀　高山寺蔵

猪」），あるいは干支の絵解きや伝記小説の挿絵といった，いわば文学に従属的な絵画ジャンルから離れて，独立した猪の造形となると，その嚆矢は森狙仙（1743-1821）あたりに見出せようか。《雪中三獣図襖》（18世紀末，京都，廣誠院）■14には猿，鹿の傍らで雪の坂を歩む親猪と，それに追いつこうと必死な仔猪が，白色の地のうえに浮かぶ。鹿の子模様，猿の柔毛，そして猪の剛毛が見事に描き分けられ，動物の家族を描かせれば右にでるものなき狙仙の腕前が見事に披瀝されている。

浅井忠（1856-1907）は1900年のパリ万国博覧会視察から戻って京都に居を移した油彩画の先駆者。パリでS．ビングのアトリエを見学し，アール・ヌヴォーの洗礼を受けた浅井は，工藝意匠ならば日本は決して欧州最新流行に負けはしないとの確信を胸に，新設の京都高等工藝学校教授に着任する。そこで浅井は数多くの斬新な提案を試みる。《鶏合蒔絵硯箱》（1906）は蒔絵師・杉林古香の協力を得て

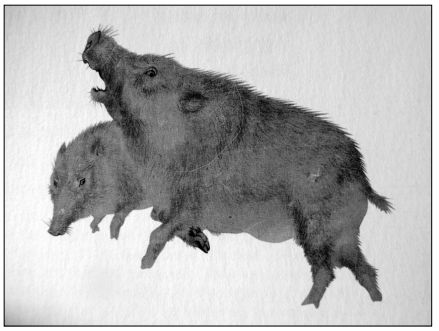


■13　曽我蕭白　十二支図のうち《猪》

完成した傑作だが，その傍らに《猪（野分）》（1906）■15として知られる硯箱がある。

「猪突猛進」という言葉があるが，それを地で行くように突進する３頭の猪。およそ伝統的で装飾的に取り澄ました京都の工藝には前例のない，大胆な意匠である。だがこの猪たちは，一体何に猛り狂って暴走を開始したのだろうか。

そこでふと思い出されるのが，夏目漱石（1867-1916）『夢十夜』である。親友の浅井は1907年12月16日に急逝する。漱石が『夢十夜』を『朝日新聞』に連載するのは，翌1908年７月25日から８月５日まで。その第十夜には，「幾万匹か数え切れぬ豚」が登場する。豚たちは絶壁のうえの庄太郎めがけて鼻を鳴らして殺到する。その鼻の頭を檳榔（びんろう）樹の洋杖で突く

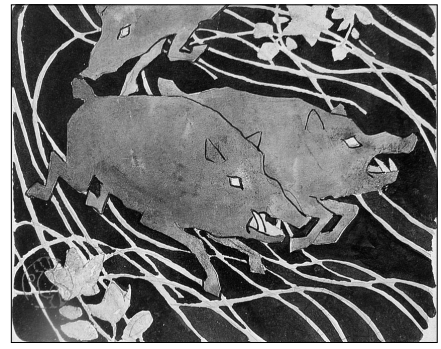


■14　《雪中三獣図襖》（部分）森狙仙筆　18世紀末　京都　廣誠院

と，豚は一頭また一頭と谷の底に落ちてゆく。だが無数の豚どもは「黒雲に足が生えて，青草を踏み分ける様な勢ひで無尽蔵に鼻を鳴らしてくる」。7日6晩豚の鼻を叩きつづけた庄太郎は，ついに精根尽き果て，豚に顔を舐められてしまい，「絶壁の上に倒れた」。

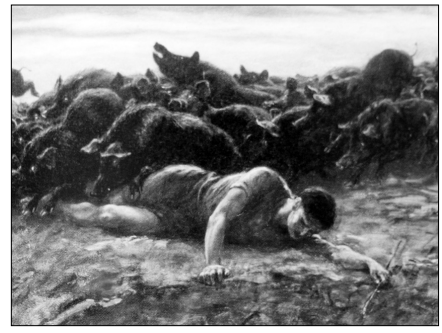
すでに尹相仁教授が指摘している（『世紀末と漱石』1994年）とおり，この漱石の「夢」には下敷きがあった。逸話そのものは『マタイによる福音書』第8章，および『マルコによる福音書』第5章に見られる，「ガラタの豚の奇跡」と呼ばれる綺譚だろう。そして漱石はロンドン留学中にテイト・ギャラリーでブリトン・リヴァイヤーの《ガラタの豚の奇跡》（1883年）■16を実見する機会があった。「豚」というが，画面にあるのは，人間に飼育された家畜の豚などではない。漱石も語る通り真っ黒な毛に覆われた野猪が，黒雲のように押し寄せてくる絵に他ならない。漱石は万国博開催中のパリで浅井に再会し，ふたりはロンドンでも交友する。その折にこの黒い猪の絵の話が交わされた，とまでは言うまい。だが，『三四郎』（1908年連載）でも漱石は浅井の遺作展のことに触れている。かりに漱石が浅井忠の遺作《猪（野分）》を見聞する機会に恵まれたとすれば，それもまた《夢十夜》の最後の話に，なんらかの影を落としている。——と空想してみるのは，心楽しいことではあるまいか。

漱石の洋行と入れ違いに倫敦から帰国した南方熊楠はこう書いている。「支那



■15　浅井忠《猪（野分）》（下絵）1906年

でも朝鮮でも猪の字は豕の事で，イノシシは山猪と書かねば通用しない。すなわち朝鮮では今年はブタの年である。ブタの年などというと余りありがたくないが，朝鮮ではブタには日本人よりよほど敬意を表して居る」（「猪に関する民俗と伝説」大正11（1922）年）と。その翌1923年から今年で十二支が9回廻った。和気清麻呂が猪に助けられて（西暦769年）から，1250年である＊。



■16　ブリトン・リヴァイヤー　Briton Rivière
《ガラタの豚の奇跡》（部分）1883年　テイト・ギャラリー

＊本稿は韓国で刊行の『十二支：韓中日比較』のための原稿として2013年8月19日に脱稿。